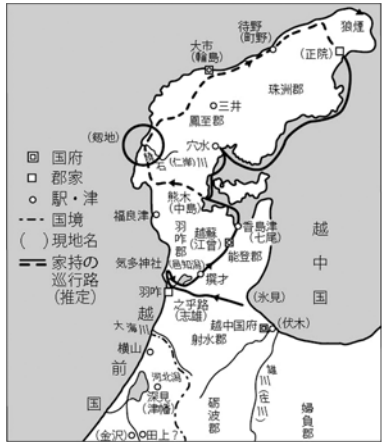
大伴家持が見た饒石川の景

藤　田　富士夫

1．はじめに

大伴家持は、天平18年（746）から天平勝宝3年（751）の間、国守として越中国に在任した。当時の能登（国）は越中国に統合されていた。家持は天平20年（748）春巡行で越中四郡（射水・礪波・婦負・新川―春巡行第1部―）を視察した後、能登四郡（羽咋・能登・鳳至・珠洲―春巡行第2部―）へと赴いた。春巡行第2部は、越中国府から之乎路を越えて羽咋郡の気多神宮に赴き参り、その後、能登郡香島津から発船し熊木村へと渡っている。そこから西へ向かい山越えをして鳳至郡へ入り饒石川（今日の仁岸川）を渡河している（第1図）。このコースが大きな謎とされている。通常であれば、熊木村から北上して穴水駅、三井駅、大市駅（鳳至郡衙）へと向かいそうなものだが、そのコースをとっていないからである。

このような疑問について諸説あるが、松尾光氏は、「越中守・大伴家持の寄り道―饒石川を渡る―」と題した論考で、「家持は国司巡行コースを大きく西に外れ、ことさらに饒石川を渡っている。それはなぜか」と問題提起をし、「筆者は、公出挙の貸し付けのための国司巡行中に赴いたのであるから、出挙に関係した業務のなかで、視察を必要とする仕事内容は何なのかと考えていくべきだと思う」と正論を述べる[1]。その上で、「国司自身が実地検分すべきは何か」を問いかけ、「それは<出挙収納>倉庫の設置状況の確認でなかったか」としている。このことは、巡行歌群の左注に「右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行し、当所当所にして、属目し作る」とあることからも頷ける。



第1図　家持の巡行路と駅・津・官衛
○印・饒石川　（註11より一一部改変）

松尾氏は、自説を述べる中で従来説を退けている。ここに、そのいくつかを紹介しておきたい。

金の産地探索説：川崎晃氏の説である。川崎氏は、饒石川への巡行を金（砂金）の産地探索と関わる行動であったとしている。当時、国司に任じられた者は大仏鍍金のための金の産地の発見が重要使命とされたとする。家持は、天平21年2月に陸奥国小田郷から黄金産出の報が朝廷にもたらされたのを知り、さっそく5月12日に長歌「陸奥国に金を出だす勅書を賀く歌」と反歌3首を作っている（巻18・4094～97）。これは、家持の産金への強い思いの表れとしている[(2)]。

対して、松尾氏は砂金の探索は国司自らが赴いてするものではなく、まず下僚を遣わして検分し、確実な場合に初めて国司の出番となるとし、傍証を期待出来ない説とした。

河川水量実見説：中葉博文氏の説である。中葉氏は、春巡行第1部の歌群に雄神川（4021）、鵜坂川（4022）、婦負川（4023）、延槻川（4024）と、いずれも今日の大河川が詠まれていることに注目し、「能登の巡行においても、越中地方と同様に、家持は、水の流れ、『水量』を意識し『水量』の多い河川を視察する巡行をしたのではなかろうか」と説いている。当時、各地で発生していた旱魃や飢饉への意識から、農耕における水の確保を課題としていたとする[(3)]。

対して、松尾氏は、当時人為的に制御しがたい川の水の利用は敬遠されており、勧農の観点から水量を確認しに行くことはないので、この説は成立しないとした。

産鉄・製鉄地の視察説：これも中葉博文氏の説である。中葉氏は、饒石川（現在の仁岸川に比定）流域に多くの奈良・平安時代の製鉄遺跡が集中していることから、「家持は、饒石川周辺から産出する鉄が都に報告するに値するものか。また調庸に値するものか自らの目で確かめたいという目的もあって、饒石川方面へ来たのではなかろうか」と説いた。この説は、後述する「製鉄炉視察説」の先駆を成すものである。

対して、松尾氏は、「国司巡行は多種類あり、公出挙のための巡行のついでに製鉄・水量の視察をしたとは考えがたい」とした。

諸説に対する松尾氏の反論は理解できるものである。その上で氏は、「もとより饒石川ぞいに古代の倉庫群が見つかっているわけでもなく、具体的根拠を示すことはできない。ただ、公出挙に関する国司巡行の最中のことであれば、まずはその業務に関係した視察と考えてみるべきだ、と思う」と述べている。本稿は、かかる松尾氏の見解に触発されて饒石川歌成立の背景を探ろうとするものである。けだし春出挙の巡行は確かに「業務に関係した視察」を建前としているが、多忙な中にも息抜きのための「寄り道」が配慮されていたとしたらどうだろう。饒石川の歌は、そのような“場”で詠まれた可能性があると考えている。とすれば饒石川周辺での倉庫探しは望めないかもしれない。また中葉博文氏のほかにも、針原孝之氏等によって「製鉄炉視察説」が強力に説かれている。それらについて、ここに私考を述べてみたいと思う。

2.製鉄炉視察説は成立するか

（1）針原孝之氏による製鉄炉視察説

「はじめに」も書いたが、中葉博文氏は饒石川渡河の背景を製鉄視察と関係づけて論じている。当地とその周辺域に能登有数の製鉄遺跡が集中しているからである。饒石川の河口には「饒石川」の万葉歌碑が建っている。その地は剱地（つるぎじ）と呼ばれている。もと刀工がいたため剱打と言っていたのが、後に、今の呼称になったとされる[(4)]。地名にも表れているように、当地域の製鉄史は歴史を重ねている。

万葉学者の針原孝之氏は、近年、家持の製鉄炉視察説を論じている[(5)]。針原氏は、「能登巡行は海辺を通っているが、前半の越中の四首と比べると、能登のほうは、米作りに適さないところである。稲作に適さない場所を巡行して出挙といえるかという疑問がある」とする。そして「ここで問題なのは饒石川を渡った所から諸岡地区にかけて古代製鉄の拠点（鳳至郡門前町の道下中山製鉄遺跡）があったので、ここを視察して、さらに出挙を続けたと思う」といい、つづけて「道下中山製鉄遺跡では七～八世紀の箱形炉も確認されている。家持の巡行は出挙を目的としたものであったが、鉄生産の実情視察が重要な任務だったと推定できる」としている[(6)]。

その論拠を針原氏は、箱形炉は奈良時代の所産とする関清氏の研究に求め、敷衍して家持による越中国全域に及ぶ製鉄遺跡視察の可能性を論究している。その論調からは箱形炉が発掘されておれば、即、家持が視察したとする印象すら受ける[(7)]。

けれども関氏が示している年代観（8世紀前半、8世紀後半、8世紀などと書く）は、箱形炉あるいは周辺遺構や包含層から出土した須恵器を1984年当時の相対編年に基づいて成したものである[(8)]。相対編年は、平城京などの歴年代資料で枠組みを整えてはいるが歴年代の信頼性についての見直しが小幅ながら行われ、今日では窯跡の一括資料を基準としての、より精密な区分が志向されている。

もし、家持が春巡行をした天平20年（748）操業の製鉄炉を知るには、少なくとも8世紀第2四半期の後半から第3四半期の初めころの須恵器を伴

う必要がある。富山県域では射水市（旧小杉町）の天池窯跡2号窯・1号窯、富山市の栃谷1号窯・2号窯の須恵器並行期において初めて“検討の入り口”に立てるのである。それらは理論上20～25年間の幅を有しており、その中で天平20年という「特定年」の須恵器を認めるのは至難の業である。かつ、消費に伴う流通期間の問題があって、史実として論証されるべき天平20年の須恵器を特定するのは不可能である。それは絶対年代（歴年代）を求められていることを意味する。考古学が用いている土器の相対編年からはたどりつくことはできない。要するに、双方は尺度が異なる世界に在るのである。

天平20年を1年遅れても、1年早くても“史実としての”製鉄炉視察説は成立しない。このような問題を方法論的にクリアーしないと正答は得られない。これは「無いものねだり論」かもしれないが、このような厳密性を求める視点をもたないと史実に近づくことはできない。

製鉄炉視察説にあっては箱形炉による製鉄遺跡が営まれておれば、それは全て家持時代のものと解釈されている嫌いがある。富山県内に製鉄遺跡が109か所あったとしても[9]、鳳至郡門前町に50か所を越す製鉄遺跡があったとしても[10]、家持の視察に耐えうる製鉄遺跡は天平20年の同時代遺跡かその直前遺跡に限定されるのである。

加えて針原氏は門脇禎二氏が[11]、家持は珠洲を出発し穴水に立ち寄っていると論じていることに触れ、「なぜ穴水に立ち寄ったかといえば、ここに製鉄炉があったからである。そうすると、常に出挙のおりに、製鉄炉視察が重視されていて、どういう状況で鉄の生産がなされるか理解できる」としている。

さらに越中国での春巡行は「表向きは出挙の道順にあるけれども、裏側には製鉄炉の視察、検察する目的があったのだろう」と論じている[12]。話としては面白いが検証に耐えうる具体的資料の提示が欲しい。

（2）製鉄操業の季節について

もう一点、確認しておきたいのは家持が能登巡行をした天平20年春出挙の時期（季節）に操業がなされていたかどうかである。「製鉄炉視察説」に接して私が想像したのは国守家持が、製鉄炉が真っ赤に燃えさかる工房に立ち、工人をねぎらい、その技術を問い称え、管理者に今後の操業計画や問題点を問いただす場面である。製鉄操業の一番良い場面に立ち会うのが国守の視察だと思うのである[13]。

とは言うものの製鉄操業の季節を示す好都合な資料に恵まれていない。

そこで、針原氏が「須恵器製作集団と製鉄工人集団とが密接に関わっている」とする研究を援用し[14]、先ずは須恵器操業をうかがってみたい。

具体例を8世紀後半の福島県いわき市大猿田遺跡に見ることができる。この遺跡は、陸奥国磐城郡衙である根岸遺跡から北約9キロに設営された木器生産や須恵器生産などの現地工房遺跡である。ここでは何枚かの労働力編成に関わる木簡が出土している。なかでも2号木簡（・「＞玉作郷四斗」/・「＞七月廿日」）は貴重な情報を有している。そこには輸納量「四斗」、輸納日「七月廿日」が記されている。その分量などの分析から経営単位は長くても2か月（60日）程度の季節工房であり、経営月は夏季月であったとされている[15]。根岸遺跡の周辺や大猿田遺跡では製鉄も実施されていて、周辺一帯が郡衙経営による手工業生産域と解されている。

加えて参考に記すが、1969年10月～11月にかけて島根県飯石郡吉田村字菅谷で明治初期に消滅した「たたら製鉄」の復原が行われた。復原は秋季月に行われた。「復原に際しては、湿気の多い地盤を、三か月も薪を燃やしつづけて乾燥し、焼きあがった土の上に炉を構築した」とされ、以前の記録では「昼夜に四〇〇貫から六〇〇貫もの薪材を、長いときは100日も焚いて地盤の乾燥」を行ったとされている[16]。

須恵器操業でも雨や湿気は大敵である。関東の須恵器窯では梅雨時や冬場での操業は物理的に困難であるとされる。窯業では窯壁内の温度を高くする必要がある。湿気が多いと窯の温度があがらず製品の焼き上がりが上手く行かない。須恵器操業はその土地の天候や自然環境に大きく左右されるという[17]。島根県菅谷のたたら復原での地盤乾燥作業も同じ理由によって行われている。

このような東国の事例や、雨季や湿気を嫌う製鉄操業の実際を考えれば、奈良時代の越中国（能登）での操業もまた夏季月から秋季月とするのが穏当であろうと思われる。箱形炉では操業の終わりに炉底に沈んでいる鉄塊を取り出す。鉧出し作業によって、操業を終えた炉は壊され地表に姿をほとんど止めない。

家持は天平20年（748）の春出挙で饒石川を渡っている。時季について3月とするなど諸説あるが、私は巡行歌群第2部は4月中旬頃（陽暦）の春季月に行われたと考えている[18]。当時の能登地域での製鉄は郡衙の管理のもと半農半工で実施されていたであろう。だとすれば、春季月の労働力は水田にもっぱら費やされていて、多大な労働力を必要とする本格的な製鉄操業は成されていなかった可能性が大きい。

これらの理由で、家持の春巡行時に製鉄炉は稼働していなかったと推察

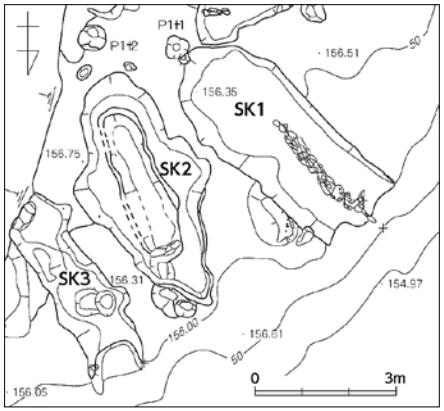
できる。製鉄炉視察説に従えば、家持は工房予定地の何もない原野に立ち、また廃炉となった工房を視察したということになる。そのような国守業務は、私には想像できない。

（3）道下中山製鉄遺跡の開始時期

製鉄炉視察説では、奈良時代の製鉄炉が検出されている門前町の道下中山製鉄遺跡を重視している。遺跡は八ケ川右岸河口近くの山地に立地する。発掘調査が平成11（1999）年度と12年度に行われ、3基の箱形炉と1基の竪形炉が検出された。鉄滓などの関連資料は大量にあり186頁にもなる報告書が刊行されている[19]。

この遺跡は仁岸川の北東約8.5kmに位置する。道下地区には、ほかに奈良時代の可能性のある鉄滓が、道下鉄川5号製鉄遺跡、道下鉄川6号製鉄遺跡、道下菅田製鉄遺跡で認められている。しかし発掘調査によるものではなく、ここでの検討になじまない[20]。

道下中山製鉄遺跡の箱形炉について針原氏は、越中四郡の射水丘陵で8世紀代のものが見られることから、それを敷衍して能登のそれも家持時代に想定している。確かに、能登の仁岸川やその近域の八ケ川流域では多くの遺跡で製鉄関連資料が表面採集されている[21]。しかし、その大半は穴澤義功氏が鉄滓観察した所によると平安～鎌倉時代（9～13世紀）に属するものとされている[22]。奈良時代と期待されている道下中山製鉄遺跡では4基の製鉄炉が発掘され、3基は長方形箱形炉で1基は竪形炉であった。前者の3基は炉壁の分析などからSK3→SK1→SK2の順で操業されたとされている（第2図）。年代は「出土した土師器と炉跡の基本形態から、奈良時代後期の八世紀代と見込まれるが、一部は九世紀前半に下る可能性がある」とされている。また後者は、「平安時代中期の十世紀代頃の操業と考えられている」とされている[23]。



第2図　道下中山製鉄遺跡の炉跡配置実測図
（註19より）

問題なのは長方形箱形炉の操業期間である。ここに提示された年代観を機械的に製鉄炉の推移に当てはめると、先ずSK3が「奈良時代後期の八世紀代」に開始され、SK1での盛行期を経て、SK2が「九世紀前半に下る可能性がある」ということになる。仮に天平20年（748）に家持がSK3の操業を視察したとして、その後、最終に操業されたSK2が「九世紀前半に下る可能性がある」というのである。家持の製鉄炉視察説に立てば、それは家持以降、操業が停止するまでの間、50年余を有したことになる。世代を超えての操業の実施を想定しなければ成立しない。

ここで注意したいのはSK1の土層断面が三層を成している事実である。「西側のSK1は、土層断面に大きく三層の木炭層と焼土・炉壁層がみられたことから、箱形製鉄炉が三回築造されたとみられる」とされている。このことはSK1の操業が連続した時間の中で3回成されたことを示している。そしてSK3とSK1はともに炉軸を同一方向に置いている。このことはSK3→SK1の操業がさほどの時間を置かず連続して成されたことを示唆する。一方、SK2は両者の間にあってやや軸線をずらしており、前二者とは、いくらかの時間を置いて営まれている。最終操業とされるSK2が、正確に先行炉のSK3とSK1の中間に築造されている。このことは先行炉の痕跡や記憶が残っている間の設置であることを示す。その期間が50年余あるというのでは大地の記憶が薄れてしまう。操業は世代を越えない範囲で短期間に行われたものとできる。仮にSK3の操業を家持が視察したとしたら、かかる遺構の在り方に即した操業実態の説明ができなくなる。SK3の操業は、家持以降の8世紀代後半に始まったとするのが穏当である。

本遺跡では製鉄炉の炭化木のAMS年代測定が行われている[24]。SK3（calAD665）→SK1（calAD780、calAD795）→SK2（calAD675）と出ている。（括弧）は較正暦年代値である。その年代は、SK2がSK1よりも古く出ていて、放射性炭素年代測定と考古学的所見とが整合していない。もっとも放射性炭素年代は製鉄に用いられた木炭や燃料の年代を測っているので厳密には操業年代を示していない。数値を参考としながら、どのように解釈するかが求められる。この年代では古年代はAD665年、新年代はAD795年と出ていて、その差は130年ある。すなわち放射性炭素年代の測定値をそのまま操業年とは出来ないのである。

製鉄炉の年代については、地道ではあるが遺跡に残された土器に定点を置くのが着実な迫り方である。それについて報告書＜追加＞は、「土師器　31片が出土し、8世紀と10世紀のものとみられる。須恵器　2片が出土し、9世紀のものとみられる」としている。これが全文である。実測図や属性の記載がないので年代割出の検証ができないが、考古学者が、「操業時期は、出土した土師器と炉跡の基本形態から、奈良時代後期の八世紀

代と見込まれるが、一部は九世紀前半に下る可能性がある」と判じているので、それに従っておきたい。

このように調査所見では、家持時代（奈良時代中頃）以降に操業の始まったことが暗示されている。それが『新修門前町史　図説門前町の歴史』で、大伴家持が饒石川のほとりに立ったのは「巡行目的にそった耕作田の状況視察か、もしくは武門の棟梁として製鉄の里にまつわる利権にも大きな関心があったのではなかろうか」と記し[25]、さらに『新修門前町史　通史編』では、巡行の目的は「この製鉄の里の実情を視察することであったかもしれない」とする[26]。かかる解釈が遺跡の調査成果から導き出されてきたものかについては疑問がある。

また、中葉博文氏は門前町の鉄川流域に位置する「大生製鉄遺跡群」出土の鉄滓が放射性炭素年代測定によって「奈良時代から平安時代の頃の古代製鉄遺構だと判明した。時代的に家持が饒石川を渡った頃もそれに含まれる」と論じている[27]。けれども分析された2件のデーターはAD570±90とAD480±180である[28]。新しい方の年代の最大誤差を考慮してもAD660年で、家持時代を含んではいない。中葉氏は、家持時代に引き寄せて解釈するが、報告されている数値には、そのような情報は含まれていない。

数値はあくまで、基本年代と誤差の範囲を示しているだけである。もっとも今日では、その数値はそのままでは使えない。歴年代較正によって補正しなくてはならない。このことを考慮したとしても理屈は同じである。

ここで見たように、幾人もの研究者が説いている家持の製鉄炉視察説はいずれも考古学的根拠が希薄である。私には、家持の饒石川渡河の背後の動機に製鉄炉視察があったとは思えない。当地の製鉄は家持以後の8世紀後半に成った可能性が大きいからである。今日説かれている製鉄炉視察説は期待感だけが先行しているように思われる。冷静な視点に立った学問的検討が求められる。

3. 家持が見た饒石川の景

(1)「饒石川」歌が内包するもの

それでは家持は饒石川で、どのような景を見たのであろうか。

家持は春巡行第2部歌群で4首の歌を残している。羽咋郡から能登郡を経て鳳至郡へと至った時に次の歌を詠んでいる。

鳳至郡にして饒石川を渡る時に作る歌一首

妹に逢わず　久しくなりぬ　饒石川　清き瀬ごとに　水占延へてな（巻17・4028）

口語訳は、「妻に逢わないで　久しくなった　饒石川の清い瀬ごとに　水占いをしよう」とされている[29]。「饒石川」は、今日の仁岸川（石川県輪島市門前町〈旧・鳳至郡〉剱地で日本海に注ぐ）に比定されている。この比定には異説が無い。春巡行歌は各郡原則1首だけが集中に収載されている。家持にとって、鳳至郡では「饒石川」が最も印象に残る“場”であったとできる。それは何に起因するのであろうか。

ここで万葉学者の見解を見ておきたい。

針原孝之氏は、「『饒石川清き瀬ごとに』と詠んで、川の清なることを歌い、聖地として受けとめている。その土地の讃歌として理解できる。巡行における『川』を歌いあげることによって聖なる地への思いであり、天皇の代行者が出挙にでかけ無事に遂行するのは国守の任務である」とする[30]。

永藤靖氏は、能登巡行歌の中の歌に、「いままで出てこなかった家持個人の感情が表出されている」ものがあると説く。その最初が「能登郡にして香島の津より船発し、熊来村をさして往く時に作る歌二首」の題詞を有するもののうち次の1首であるという。

香島より　熊木をさして　漕ぐ船の　梶取る間なく　都し思ほゆ（巻17・4027）

永藤氏は、この歌の「都し思ほゆ」の語句から家持の内面を読み解いている。「この句は、今までの、いわば官人家持の姿勢とは異なる自己の内面をうたっていることばであった。王権の意を体して馬上豊かに巡行していく官人家持はそこにはいない。国衙を越えて、遥か都へと己の想いは動いている。公的な官旅に、家持ははるか僻地へと来てしまったという想い、つまり都を離れた地方役人への憂いを重ねてきているのだ」とする。「ここまでくれば〈饒石川〉の歌の『妹に逢はず久しくなりぬ』という句が示すように、その想いが都にいる妻へ向かうのは当然であろう。（中略…ここに）あるのは湿度の高いセンチメンタルな叙情である。国守の立場を離れ、彼の想いは都にいる妻、大嬢へと向かっている」と論じている[31]。

この歌（巻17・4028）から、針原氏は饒石川を聖地と見、永藤氏は饒石川の地が家持に「妹」への私的叙情感を抱かせたと見ている。次に、これらの解釈に沿って、本歌の意味するところに迫ってみたい。

写真1　奈良・吉野川と「妹山」−上市から−

写真2　鳳至郡の仁岸川と「城山」の景

写真3　吉野川と「妹山」

写真4　仁岸川と「城山」

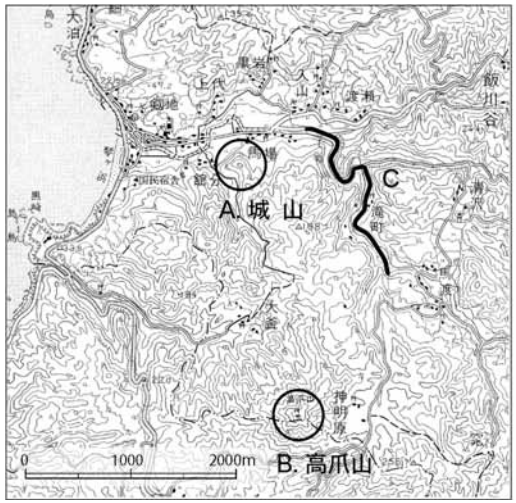
（2）饒石川で「妹」を想う

針原氏は饒石川をして「川の清なることを歌い、聖地として受けとめている」とする。実際にどのような景が展開しているのであろうか。仁岸川に沿って歩いてみた。河口から250mほど上流の「にしきがわはし」（錦川橋）近域に立って山域を仰ぎみて驚いた。

そこには以前、筆者が奈良県の吉野川でみた「妹山」（写真1・3）の風景が立ち上がっていた。地元・剱地で「ジョウヤマ（城山）」と呼んでいる円錐形をした秀麗な小山である（写真2・4）。標高105mを最頂部とする。平野との比高差は約90mある。それは神奈備を思わせる山容を成している（第3・4図）。

もちろん城山の呼称は、中世以降の山城の存在を示唆する。事実、「城の構築を十四世紀代の総持寺文書に認められる仁岸氏に比定する見解もあるが、城郭遺構の規模と内容から再考すると、戦国期以降に構築された小規模な山城である可能性が最も高い」とされている[32]。以前の呼称が失われているのは残念であるがやむを得ない。

家持は、かかる仁岸川の「城山」を見て、そこに仙境吉野川の「妹山」



第3図　仁岸川と周辺地形図
A.城山、B.高爪山、
C写真5・6の景が展開する範囲

第4図　城山地形図（矢印は写真2の撮影地点）

の景を重ね合わせたのである。それによって妹（妻）への私的叙情感が湧き出たものと思われる。それが「巻17・4028」の直接的な歌作動機へと連なったであろうと考えられる。

（3）仁岸川と吉野川の河川景

加えて、仁岸川の流景も吉野川を思わせるところがある。仁岸川は、門前町と富来町の境界域にそびえる高爪山（標高341m）に水源を発する全長10.9Kmの小河川である。水深は浅く河口近く（馬場地区）で約40㎝である。河口から2km上流で沖積平野から一気に深い山域へと入り込む。山域は新第三期中新生前期生成によるデイサイト質火砕岩（堆積岩はさむ）や砂岩・泥岩・礫岩（非海成）から成っている[33]。山域に入るや

写真5　仁岸川の景（滝町地内）

写真6　仁岸川の景（滝町地内）

写真7　吉野川・宮滝の景

写真8　吉野川・宮滝の景

写真9　和歌山県・紀ノ川の「妹山」の景

写真10　吉野川の「妹山」(左)と背山(右)の景

否やデイサイト質火砕岩の基盤が灰青色を成して川底に露出し、川岸は浸食作用によって大きくポケット状に抉られ湾曲を成している（写真5）。さらに上流に位置する滝町では河岸に礫岩を主とする集塊岩が露頭していて、仁岸川がそれを浸食蛇行している（写真6）。このような光景が山域入口の渡瀬地内から谷奥の馬渡地内までの間約2kmに展開している。

一方、吉野川の仙境・宮滝では川底の所々に三波川変成岩に属する堅い緑色片岩などが露出し早瀬を成している（写真7・8）[34]。写真に示したように、吉野川と仁岸川は互いの景観が似ている[35]。

針原孝之氏は仁岸川の歌から聖地を読み解いた。家持は仙境吉野川を想いやった。家持が「清き瀬ごとに」饒石川を渡河したのは、そこに吉野川を重ね合わせる確認のためでもあったようだ。そこに吉野川に通じる聖なる水を見たからこそ「水占延へてな」へと心が動いたものと思われる。

(4) 境界域を成す仁岸川と「妹山」

吉野川は、妹山付近で峡谷を出て左右一直線の段丘が形成する通谷地形となる。河川の流相の変換点にあるのが妹山なのである。持統・文武朝に、吉野を神仙境とする観念が高揚し、たびたび行幸が行われたことは周知のところである。かかる行幸の目的地である吉野宮や吉野離宮は、末永雅雄博士や近年の奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査によって吉野川に沿った宮滝遺跡（吉野郡吉野町宮滝）であることがほぼ確実となっている[36]。

妹山は、かかる仙境吉野への入り口に位置している。すなわち仙境の境界域に存する神奈備として存立している。一方、和歌山県かつらぎ町にも『万葉集』に歌われた妹山・背山が紀ノ川を挟んで存している。そこは、『日本書紀』孝徳天皇の大化二年（646）の改新詔で、畿内国の範囲を定めた折「南は紀伊の兄山（せのやま）より以来、…（略）…」の地とされている。兄山とは背山のことである。つまり畿内と畿外の境界域に、妹山背山が聖なる紀ノ川とセットになって存している構図がある。そこでの妹山の比定については諸説あるが、私は紀ノ川南岸の西渋田地内に所在する標高209.9mをピークとする円錐形の山容がふさわしいと思っている（写真9）[37]。

さて、仁岸川の「城山」は、河川が沖積平野へと流れ出た場所に位置する。眼前には日本海をみる。山域と平野、そして海域との境界域に位置しているのが城山なのである。仁岸川上流域を仙境に例えれば、境界域への入り口表象として存立している。また、「仁岸川流域は、古代以来、鳳至

郡と羽咋郡の境界」を成している[38]。城山は、吉野川の妹山や紀ノ川の妹山と同質性を有すると言えそうである。

(5)「妹山」の古層性と周知

ここに仁岸川「城山」と吉野川「妹山」の相似比較から、家持は仁岸川を吉野川に擬定し「城山」から妹山→妹（妻）への思いをつのらせたと推考した。

そうすると家持時代には、すでに吉野川に「妹山」が存在し、それを家持が周知していたことになる。家持には、題詞に「吉野の離宮に幸行さむ時のために儲け作る歌一首　并せて短歌」と記した歌三首がある。儲作歌とは「前もって用意しておく歌の意」であり、「聖武天皇の吉野行幸のあることを予想し、家持はこれに供奉して、天皇から歌を求められる場合を想定して作ったのである」とされている。それは天平感宝元年（749）5月のことである[39]。

高御座　天の日継と　天の下　知らしめしける　皇祖の　神の命の　恐くも　始めたまひて　貴くも　定めたまへる　み吉野の　この大宮に　あり通ひ　…（下略）…　（巻18・4098）

反歌

古を　思ほらすしも　わが大君　吉野の宮を　あり通ひ見す（巻18・4099）

もののふの　八十氏人も　吉野川　絶ゆることなく　仕へつつ見む（巻18・4100）

これらの歌群からは、家持が事前に吉野宮あるいは吉野川（妹山）を訪れていたかは明確でない。子細な年譜でも明らかでない[40]。けれども仁岸川と吉野川との酷似性をみると、家持は事前に妹山や宮滝を知っていたと言わざるを得ない。

ところで、当時、まだ吉野の「妹山」は成立していなかったとする説がある。村瀬憲夫氏が説くもので、集中の妹山・背山全15首すべてが紀ノ川の妹山・背山を詠んだものだとする[41]。もし、そうであるならば私がここで論じている“仁岸川で家持が「妹山」を想起して妹の歌を詠んだ”とする新説の根拠を失うこととなる。そこで、「妹山」の景に関する古代史や万葉学者の見解をみておきたい。

先ずは妹山を説明しておきたい。それは奈良県吉野郡吉野町上市に所

在する。吉野川をはさんで右岸に妹山が、左岸に背山が相対する。二山をもって、いわゆる妹背山とみなしている（写真10）。妹山は小孤立丘陵で円錐形の山容を示し標高は約260mで吉野川との比高差は約90mを測る（仁岸川の「城山」と同一規模を成す）。背山は紀伊山脈の支脈の一つで、整美な三角形を成し標高は272mを測る。「妹山は古来大名持の神の鎮座する山としてあつく崇敬された。忌山すなわち禁忌的信仰の神の山として『妹山の土は生きているから木も毎日様子が変わる』『山の上に池がある』など神秘な伝承のある山である」とされる。樹叢は特殊暖地性植物が繁茂しており、国天然記念物の指定をうけている[42]。

妹山の南麓には式内社大名持神社が鎮座している。平安時代の貞観元年（859）正月27日に正一位の神階が授けられている。それは格段に高い神階である。このことについて和田萃氏は、「平安時代になって、にわかに妹山に鎮座する大名持神社に対する信仰が高まったとは考えにくい。むしろ七世紀後半に大和でも出雲のオホナムチ神に対する信仰が高揚し、吉野の妹山に勧請された可能性が大きい」としている[43]。

かかる和田氏の考説に依拠しつつ稲垣耕二氏は柿本人麻呂歌集の次の歌は、吉野の妹背の山を詠んだものと説いている。

大穴道　少御神の　作らしし　妹背の山を　見らく良しも（巻7・1247）

「大穴道」は大名持神社の祭神である出雲の大己貴神を意味することから、この歌は「大和国吉野郡の大名持神社の社殿背後に見える妹山と、吉野川をはさんで対岸の背山を詠んだものであった」とする。

村瀬憲夫氏による「妹背山」歌の紀伊路説については、「紀伊路の妹背山歌論は、持統朝の阿閇皇女歌や、奈良時代の春日老歌、笠金村作歌などをめぐって興味ある変遷の歴史をたどることはできるものの、人麻呂歌集の妹勢能山をそれによって説明しうるものでないことも明らかである。奈良時代になって始めて『妹』と『背』と二山が揃うことになった紀伊国のそれを、天武朝の人麻呂が大穴道と少彦名の創造した二山として讃えることなどあろうはずもないから――。当然人麻呂歌集1247は、もっと古くから両山併存の形で公認されていた山を詠んだ作品に違いないと思われる」としている[44]。

これらに従えば、吉野の「妹山」は「背山」と併存の形で7世紀後半にはすでに公認されていたとできるのである。

4. おわりに

大伴家持は、天平20年の春出挙の巡行で越中国鳳至郡の「饒石川」（仁岸川）で歌作を行っている。そこは能登郡衙から鳳至郡衙へ至る幹線ルートから外れていて、狭い沖積平野があるが当時の稲作環境として相応しい地ではなかった。人々の生活痕跡は薄かったとみられ、実際、奈良・平安時代の遺跡はまだ知られていない[45]。

このため家持の足跡は「寄り道」と見られ、背景について様々な考察が行われている。本稿の前半では、近年、諸氏が傾倒しつつある「製鉄炉視察説」が成立しないことを論じた。その時期の仁岸川やその周辺（八ケ川流域）も含めて製鉄が稼働していなかった可能性が高い。家持は製鉄炉から立ちあがる煙を見ていなかったであろう。

家持はなぜ「饒石川」へと歩を進めたのか。これについて、仁岸川の景が奈良・吉野川と類似していることが最大の理由と解される。仁岸川河口近くに神奈備型の山容を呈して存立する「城山」に吉野川の「妹山」を重ねあわせたことから妹（妻・大伴坂上大嬢）への私的叙情感が湧きおこり巻17・4028歌が生まれたと推考した。吉野川投影説とでもいえようか。

吉野路や紀伊路の「妹山」には「背山」が対になっている。仁岸川ではどうかといった疑問が生じる。まだ論述できる段階ではないが、城山の南東約2.5kmにある三角形の神奈備型を呈する高爪山（標高341m）が、家持の意識中に顕在していたのではないかと想像している（第3図）。かかる私案が成立するなら、中葉博文氏が佃和雄氏の踏査を参考としてまとめた巡行経路のうちのCコース案（仁岸川中流）が有力となろう[46]。

それでは家持は、饒石川の景をどのようにして知ったのであろうか。もちろん家持自身が、初めて訪れた地を歩いて発見したのではないだろう。家持にかかる景を見せようと事前に画策し周到にルートを選定した人物がいたはずである。その人物は吉野川の景を周知している大宮人しかいない。有力候補に大伴池主がいる。池主は家持より先に越中国府に赴任している。国内を隅々まで熟知する機会を持ちえた官人である。彼は、天平18年（746）には越中掾の位を授かっている。同年、家持が越中守として赴任した後、ふたりは親交を深めている。池主の万葉歌の初出は天平10年（738）10月である。当時は春宮坊少属、従七位下であった。

十月（かみなづき）　しぐれにあへる　もみち葉の　吹かば　散りなむ　風のまにまに
（巻8・1590）

題詞に「橘朝臣奈良麻呂、集宴を結ぶ歌十一首」とある。奈良麻呂の父は天平15年（743）に左大臣にまで上りつめた橘諸兄である。早くから有力氏族である橘氏と親交があり集宴に招かれる地位にあったことが知られる[47]。

かかる池主が吉野川の景を事前に見知っていたと推考するのである。池主が饒石川にそれと類似した景の存在するのを知り、家持を、春巡行を利用して当地へと誘ったものと推考したい。

なお、吉野川投影説が成立するには吉野の妹山が奈良時代に、すでに公認されていなくてはならない。饒石川の「城山」の景は「妹山」そのものである。私の同定が正しいとすれば、逆論となるが饒石川の景から「妹山」が想起されている訳であるから、吉野の妹山は、当時すでに家持や大宮人に認知されていたところとなる。

ここで触れておかなくてはならないのは村瀬憲夫氏による妹背山論である。万葉歌の全15首は紀伊路のそれを詠んだものとする。近年、紀伊路の妹山や背山の比定について「一山二峰」の新論を呈し、さらに持説を補強されている。ただ、それが正しく奈良時代における神体山観を反映しているかについて私は考えを異にしている。いずれ稿を改めて詳述したいと思っている。

筆者は地域学や考古学を専攻する者である。近年、これまでの万葉学において実景論的視角が希薄なのではないかと感じたことが幾度かある。それらに関して私なりの視点でもって何本かの論考を物してきた。本稿もそのような視点から、家持が見たであろう饒石川（仁岸川）の景を考察したものである。ここでは仁岸川と吉野川との景の共通性を強調した。それは筆者の思い込みかもしれないが、家持の「寄り道」問題解決への糸口となれば幸いである。

本稿では、推論を重ねた個所や解決済のことや失当、誤解に基づく記述も多々あると思われる。これらについて識者のご教示とご批判をいただければ幸いである。なお、本紀要への掲載にあたって敬和学園大学の松本ますみ教授のご指導を頂いた。記して厚く謝意を表したい。

註

（ 1） 松尾光「越中守・大伴家持の寄り道―饒石川を渡る―」『歴史研究』591号＜第53巻第5号＞歴研　2011年／50～53頁

（ 2） 川崎晃「大伴家持の越中国赴任」『環日本海歴史民俗学叢書13　古代の越中』高志書院 2009年／81～82頁

（ 3） 中葉博文「能登の川瀬―家持の饒石川巡行―」『水辺の万葉集』笠間書院 1998年／316～325頁

（ 4） 西山郷史「序章　門前町の民俗　第二節」『新修門前町史　資料編6　民俗』石川県門前町　2005年／25頁

（ 5） 針原孝之『日本の作家100人　大伴家持―人と文学―』勉誠出版　2011年／127～129頁。なお、針原の「大伴家持と越中巡行―光と影―」（『高岡市萬葉歴史館叢書20 奈良時代の歌びと』高岡市万葉歴史館　2008年／108～133頁）と題した先行発表がある。前者は内容において後者とおおむね同一文を成し再録版と思われる。ここでは新稿の2011年稿を対象に評したい。

（ 6） 針原孝之氏は、道下中山製鉄遺跡で7～8世紀の箱形炉が確認されていると書くが、実際は8世紀後半の所産のようなので拡大解釈が過ぎる。私は「7～8世紀」が一人歩きし、“家持時代”と重なるとする一般論が醸成されてくるのを恐れる。ただ、その誤認は恐らくは針原氏に帰するものではなく、戸澗幹夫氏の見解（「第三章　奈良平安時代　概説」『新修門前町史　資料編1　考古・古代・中世』石川県門前町　2003年／90頁）をそのまま引き写したことから生じたものと推測される。戸澗氏は「その北の丘陵上には、七～八世紀頃といわれている箱形炉や炭窯などが検出された道下中山遺跡が至近しており、…（下略）…」と書いている。また、別稿「煙立つ能登の島山―古代窯業と製鉄遺跡―」（『図説　能登の歴史』郷土出版社　2011年／48頁）でも、「輪島市門前町の道下中山製鉄遺跡では、七～八世紀頃の箱型炉三基と十世紀頃の竪型炉一基とともに、…（下略）…」としている。戸澗氏は、道下中山製鉄遺跡の操業開始を7世紀を含めて示しているのであるが、かかる年代提示の根拠がはっきりしない。調査報告書の「第6章　まとめ」（『道下中山製鉄遺跡』門前町教育委員会　2003年／161頁）では、「本遺跡から発見された8世紀の箱形炉と9世紀の縦型炉によって、…（下略）…」とあるが、7世紀とはされていない。

（ 7） 針原孝之『日本の作家100人　大伴家持―人と文学―』勉誠出版　2011年／136～155頁

（ 8） 関清「富山県における古代製鉄炉」『大境』第8号　富山考古学会　1984年／83～94頁

（ 9） 註7／136頁

（10） 註3／323頁

（11） 門脇禎二『日本海域の古代史』東京大学出版会　1986年／148～150頁

（12） 註7／127～155頁

（13） どこに砂鉄や砂金があるかなどの探索は国守の仕事ではないだろう。このことは松尾光氏が金の産地探索説否定の中で述べている（松尾光「越中守・大伴家持の寄り道―饒石川を渡る―」『歴史研究』第591号＜第53巻第5号＞歴研　2011年／52頁）。

（14） 註7／147頁

（15） 渡辺一『古代東国の窯業生産の研究』青木書店　2006年／354～357頁。文献を富山市埋蔵文化財センターの鹿島昌也氏から教えていただいた。お礼申しあげたい。

（16） 山内登貴夫『和鋼風土記　出雲のたたら師』角川選書76　角川書店　1975年／19・36・117頁

（17） 恵器窯の操業について駒澤大学の酒井清治教授（考古学）のご教示を得た。

（18） 藤田富士夫「大伴家持の春巡行と立山の景」『万葉古代学研究所年報』第9号　万葉古代学研究所　2011年／220頁

（19） 佃和雄・大澤正己・鈴木瑞穂・広岡公夫ほか『道下中山製鉄遺跡』門前町教育委員会　2003年。報告書には「正誤表」と「追加」がA4版プリント各1枚追加添付されている。本稿の引用は、それらすべてを含めて行った。

（20） 佃和雄「門前町の製鉄遺跡の鉄滓の分類」『道下中山製鉄遺跡』門前町教育委員会　2003年／10頁

（21） 佃和雄「門前町の製鉄遺跡とその考察」『石川県考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会　1990年／109～128頁

（22） 註20／10頁

（23） 垣内光次郎「（八）道下中山製鉄遺跡」『新修門前町史　資料編1　考古・古代・中世』石川県門前町　2003年／122～123頁

（24） 山形秀樹「放射性炭素年代」『道下中山製鉄遺跡』門前町教育委員会　2003年／152頁

（25） 戸澗幹夫「製鉄の里と大伴家持の巡行」『新修門前町史　図説門前町の歴史』石川県門前町　2004年／17頁

（26） 戸澗幹夫「第二章　奈良・平安時代　第一節人々の暮らしと生業」『新修門前町史　通史編』石川県門前町　2006年／41頁

（27） 註3／323頁

（28） 佃和雄・永井雄三・木立雅朗「門前町・大生製鉄遺跡群の14C年代測定」『石川県考古学研究会々誌』第30号　石川考古学研究会1987年／84頁

（29） 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7　萬葉集②』小学館　2006年／222頁

（30） 針原孝之「越国」『万葉夏季大学　第18集　万葉の歌と環境』笠間書院　1996年／77頁

（31） 永藤靖「家持の越中巡行九首の世界―辺境の幻想空間―」『文芸研究』第74号　明治大学文学部　1995年／123～124頁

（32） 垣内光次郎「三八〇一　馬場城跡」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅱ（能登Ⅰ）』石川県教育委員会　2004年／76頁

（33） 紺野義夫編著「紺野義夫編図（1992）新版・石川県地質図　図面1　地質平面図」『石川県地質誌』＜付図＞石川県　1993年

（34） 堀井甚一郎「地理一・2」『吉野町史下巻』吉野町役場　1972年／8～10頁

（35） 吉野川には宮滝や飯貝（猪飼に充用した文字とされる）、柳の渡・桜の渡といった地名があり、仁岸川には滝町や飯川谷（「飯を馬につけ、ひめつる川を渡り候処、川中に落馬し、飯を流し候」とする）、渡瀬といった地名がある。地名そのものは相互に無関係ではあるが、似たような地勢展開の有ることを示唆していよう。

（36） 末永雅雄編著『増補　宮滝の遺跡』木耳社　1986年、前園実知雄「第四章　壬申の乱で表舞台に出た吉野宮―宮滝遺跡の謎にせまる―」『吉野仙境の歴

史』文英堂　2004年／105～135頁
(37)　村瀬憲夫氏は諸説ある中で、妹山と背山とが一山二峰で存立していたとする新説を呈しておられるが（「妹勢能山詠の諸問題」『萬葉集研究』第27号　塙書房　2005年／371・375頁）、私はここに用いた景を妹山に擬定している。理由は、別稿の機会を得て述べてみたい。
(38)　註32／76頁
(39)　小野寛『日本の作家4　孤高の人　大伴家持』新典社　1988年／184頁
(40)　小野寛『大伴家持大事典』笠間書院　2010年／391～413頁
(41)　村瀬憲夫「万葉集の背山・妹山―吉野の妹山・背山をめぐって―」『近畿大学文芸学部論集』18-2　近畿大学文芸学部　2007年／17～32頁、同「妹勢能山詠の諸問題」『萬葉集研究』第27号　塙書房　2005年／363～392頁
(42)　「妹山・背山」『日本歴史地名大系第三〇巻　奈良県の地名』平凡社　1981年／863頁
(43)　和田萃「第五章　古代史からみた霊地吉野―神仙境・憧憬の山河―」『吉野仙境の歴史』文英堂　2004年／147頁
(44)　稲垣耕二「大名持神社と人麻呂歌集―人麻呂の工房を探る（其の三）―」『萬葉』第188号　萬葉学会　2004年／32～45頁
(45)　戸澗幹夫「第三章　奈良平安時代　概説」『新修門前町史　資料編1　考古・古代・中世』石川県門前町　2003年／90頁
(46)　註3／302頁
(47)　針原孝之「大伴宿禰池主」『万葉集歌人事典』雄山閣　2007年／65～68頁

2011年ソーシャルメディアの動向

一　戸　信　哉

＜目次＞

はじめに
1. 各ソーシャルメディアのユーザ動向
2. 東日本大震災とソーシャルメディア
3. 各サービスの動向
　3-1.　ユーザ数8億人を突破したFacebook
　3-2.　Twitterは日本語ハッシュタグに対応
　3-3.　Googleの新しいSNS「Google+」
　3-4.　mixiは「足あと」を廃止し、mixiページをスタート
　3-5.　LinkedInの日本語化、日本法人を設立
　3-6.　ソーシャルブックマークの動向：はてなブックマークが新ユーザページを試行
　3-7.　「パーソナルクラウド」サービスの現状
　3-8.　写真共有サービスをめぐる動き
　3-9.　Tumblrのひそかな躍進
　3-10.　位置情報関連サービスとFacebook
4.「キュレーション」をめぐる動き
5. 新聞、ラジオとソーシャルメディアをめぐる動き
　5-1.　日経電子版に続く朝日新聞の電子化
　5-2.　ラジオのネット配信サービスの動向
おわりに

はじめに

ユーザが自ら投稿し、コメントし、評価することで形成されるメディアである「ソーシャルメディア」は、2011年もその影響力を増している。以前は、「Web2.0」あるいは「CGM（Consumer Generated Media)」と呼ばれていたサービスが、単に進化を遂げただけであり、「ソーシャルメディア」という用語もまた、一過性のバズワードと見る向きもあるだろう。しかし、この用語それ自体の行く末がどうであれ、従来からあるいわ